論　文

ライフデザイン学研究 13
p.175-187（2017）

「子育てひろば」の実践から検討する 特別支援学校幼稚部の地域貢献の可能性

Études sur la tentative de carée《kosodate-hiroba》: le système communautaire de soutien parentalité par les sections pour jeunes enfants des instituts médico-éducatifs

田　尻　由　起*　　森　澤　亮　介**
TAJIRI Yuki, MORIZAWA Ryosuke

要旨

本研究は特別支援学校幼稚部で実施している、子ども障害や支援ニーズの有無に関わらず、全ての乳幼児親子が利用することの出来る「子育てひろば」に注目し、利用者（乳幼児親子）が、本子育てひろばに対するニーズやその特徴、他の遊び場との違いをどのように捉えているのかを調査することで、特別支援学校における地域の子育て支援への貢献の可能性について検討した。「他の遊び場との違い」と「継続参加理由」の２項目の自由記述によるアンケート調査を実施した結果、２項目ともに「魅力的な特別支援学校の学校資源」「質的・量的に充実した子どもたちの反応」「継続参加による保護者のモチベーションの内在化」の３つの視点が確認された。特別支援学校の学校資源を利用した子育て支援事業は、特別支援教育の支援ニーズの有無に関係なく、保護者の子育てに関する不安の解消や子どもの発達を促す教育的な取り組みとして、十分に乳幼児親子の子育て支援ニーズを満たすものであった。また特別支援学校の学校資源は、「支援の場」、「遊びの場」としてだけではなく、乳幼児親子が遊びを通した「学びの場」として利用することで、子ども、保護者ともに積極的な参加への契機となっており、特別支援学校幼稚部の取り組みが、地域で子育てをする全ての乳幼児親子のための子育て支援に十分貢献できる可能性があることが示唆された。

キーワード：子育て支援　特別支援学校幼稚部教育要領　幼稚園教育要領　早期支援

*東洋大学ライフデザイン学部
**筑波大学附属大塚特別支援学校

１．問題

特別支援学校幼稚部は、特別支援学校幼稚部教育要領や幼稚園教育要領に則り、地域の特別支援教育のセンターとして、また地域の幼児期の教育のセンターとして、乳幼児や園・保護者に対して早期から子育てを支援するために、教育に関する相談や情報を提供することが求められている。特別支援学校幼稚部教育要領（第１章、第７-５）において、「(略）地域の実態や家庭の要請等により障害のある乳幼児又はその保護者に対して早期からの教育相談を行ったりするなど、各学校の教師の専門性や施設･設備を生かした地域における特別支援教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。(略）」と示されている。また幼稚園教育要領（第３章、２）において、「(略)、子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるものとする。その際、心理や保健の専門家、地域の子育て経験者等と連携・協働しながら取り組むよう配慮するものとする。」と記されている。

2015年８月の文部科学省、中央教育審議会、教育課程企画特別部会の「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告)」にて、「子供たち一人一人は、多様な可能性を持った存在であり、多様な教育ニーズを持っている」とされ、「連続性のある『多様な学びの場』において、子供たちの十分な学びを確保していく必要」があると報告された。さらに幼児教育の現場において、「子供の発達の連続性を踏まえた幼児教育を充実するために、子供一人一人の多様性への配慮や学校と家庭、地域との連携強化の観点から、幼稚園における子育ての支援等について、（中略）在り方等に関する検討を行う必要がある」と報告された。

これまで乳幼児期の子どもの子育てに関する行政的なアプローチは教育（家庭教育支援）と福祉保健（子育て支援）の施策として切り離されてきたが、2007年２月の東京都生涯学習審議会、一次答申において「都市化、核家族化により、乳幼児とその親に対する教育・医療・保健・福祉などの関係機関の地域レベルにおける連携はますます重要になってきている（東京都生涯学習審議会）」と示された。また2016年４月の児童福祉法の改正にて、その総則に「心身の健やかな成長及び発達（中略）を等しく保障される」「最善の利益が優先して考慮されるよう勤めること」が記され、2012年８月に成立した「子ども・子育て支援法」において、その対象を「すべての家庭及び子ども」とし、地域の実情に応じた子ども・子育て支援を実施していくことで、さらに両者の垣根は低くなりつつある。特別支援学校も、教育的支援を必要とする乳幼児親子や幼稚園・保育所だけではなく、地域の子育て全般のサポートや、必要に応じた連携支援が以前以上に求められている。つまり特別支援学校としてその専門性を発揮しながら、これまでの特別支援学校が対象としてきた乳幼児親子への支援に加え、地域の教育、保健、医療、福祉などと連携し、地域の子育て支援に貢献できることは何か模索していくことは喫急の課題であり、特別支援学校もその機能と地域の実情とを照らし合わせた上で、ニーズを捉えながら、地域の子育て支援に貢献していくことが期待されている。

２．目的

本研究はA県知的障害特別支援学校幼稚部が実施している子育て支援事業に焦点を当てる。これは、知的障害特別支援学校として幼稚部の物的人的環境資源を地域に還元するために、障害の有無に関係なく、子育て中の親子に活用してもらうことで、地域の子育て支援の一助となることを目指した活動であり、また特別支援学校の地域における実践的研究の場として位置づけられ、実際的な支援を担ってきた活動である。障害を持つ乳幼児期の教育的なアセスメントとそれに続く家庭支援について、従前から必要とされてはいるが、十分に解明がされておらず、障害児を持つ保護者の不安や乳幼児期からの発達を促す教育的取り組みに対する要望等に対応できていない状況があった（藤原他、2012）。そのため本活動は特別支援学校として、現状や要望に応えることのできる実際の活動の場として、また、障害の有無に関係なく実際に乳幼児親子のための具体的な支援の場として、活用されてきた背景がある。

実際の活動においては、特別支援学校の機能と地域の実情とを照らし合わせた上で、地域の子育て支援のニーズを捉えていくこともまた重要である。多様化する子育て支援の現状を調査した木脇（2012）は、多様なニーズに焦点をあて、利用者が何を求めてきているのか、あるいは利用できない親子が何を求めているのかを探る必要がある、と述べている。また大学（看護大学）を拠点とした子育て支援について岡田ら（2010）は、大学の教育・研究機能の向上と地域貢献を実現する事業として看護系の大学の特色を生かしながら、地域の求める子育て支援の充実を図ることが課題である、と述べている。特別支援学校としてその特色を生かしながら、地域のニーズを踏まえつつ、地域の子育て支援に貢献していくことが必要である。

そこで本研究はA県特別支援学校幼稚部の子育て支援事業のうち、「子育てひろば」に焦点を当てる。多くの地域の乳幼児親子が参加している「子育てひろば」について、利用する乳幼児親子のニーズを把握すること、および特別支援学校で実施されている「子育てひろば」の特徴について、どのように捉えているのかを調査することで、特別支援学校における子育て支援の特徴や、地域における貢献の可能性について検討する。

３．本研究で扱う特別支援学校における「子育てひろば」の概要

（１）概要

本研究で扱う「子育てひろば」は、都内知的障害特別支援学校幼稚部で実施されているものである。2005年に開始し、当時より地域に開放された取り組みであった。開設当時のねらいとして具体的に４点があげられる（藤原、2016より抜粋）。

・遊び場の提供を通して、母子父子（以下親子）のかかわりを豊かにする支援を行う。
・講演会や協議の場を設け情報提供や情報交換を行うことにより、子育ての悩みや不安の解消への支援を行う。
・仲間作りの場を提供することで、子育ての孤立感や閉塞感を解消するための支援を行う。
・支援が必要な親子については支援部と連携をとり、早期療育、家庭支援、家族支援につなげる。

この４点のねらいのもと、現在は障害乳幼児の早期支援による教育へのつなぎとともに、全ての乳幼児親子の子育て全般に対する早期支援による子育て機能不全の予防を目指し、特別支援学校幼稚部、支援部が協働して実施している事業である。基本的に第１週から第４週までの水曜日（長期休暇中、学校行事日等は除く)、午前10時から12時30分まで、幼稚部の教室、園庭を開放し、途中30分程度「あつまり（小集団活動）」の時間を設ける以外は、自由に幼稚部の施設を利用してもらう取り組みである。「あつまり」については、普段幼稚部在籍児が通常実施している小集団活動の縮小版を「子育てひろば」内で実施している。

研究実施年度のスタッフ構成は幼稚部、支援部の各教員と筑波大学研究員（日本学術振興会科学研究費助成事業、基盤研究（B）25285258、(2013年度から2015年度まで）による採用）である。実施日ごとに配置できるスタッフ数は変化するが、毎回おおむね10名程度のスタッフを配置した。基本的には保護者の見守り・責任のもとで自由遊びとしているが、危険な場所、子どもの集まる場所にはスタッフを配置し、スタッフは見守りという立場で乳幼児親子をサポートする。また「あつまり」の時間は主担当１名（幼稚部）が進行し、その他のスタッフは参加親子のサポートをする。「あつまり」の時間については強制参加ではないため、引き続き外遊びをしている親子への見守りも行う。なお、スタッフの各々の専門性は、特別支援教育、幼児教育、乳幼児期の発達心理学などである。

（２）利用者の変化

本「子育てひろば」は事業開始当時から、乳幼児親子であればだれでも参加できるようオープンな広場である。だが主催が知的障害特別支援学校であったためか、近隣地域にはあまり周知されず、2013年度までは多少の増減はあるものの、一定の登録児数であった。2014年度より登録児が急増し（図１)、年間の延べ利用回数が急増した（図２）一方で、特別支援学校がこれまで支援対象としてきた、特別支援教育の支援ニーズを持った登録児数は、急増した３年間を比較しても変化は見られない（図３)。急増していたのは、特別支援教育の支援ニーズを持たない、近隣地域の乳幼児親子の登録児数であった。なお、本研究における特別支援教育の支援ニーズを持つ子どもとは、初回利用時および

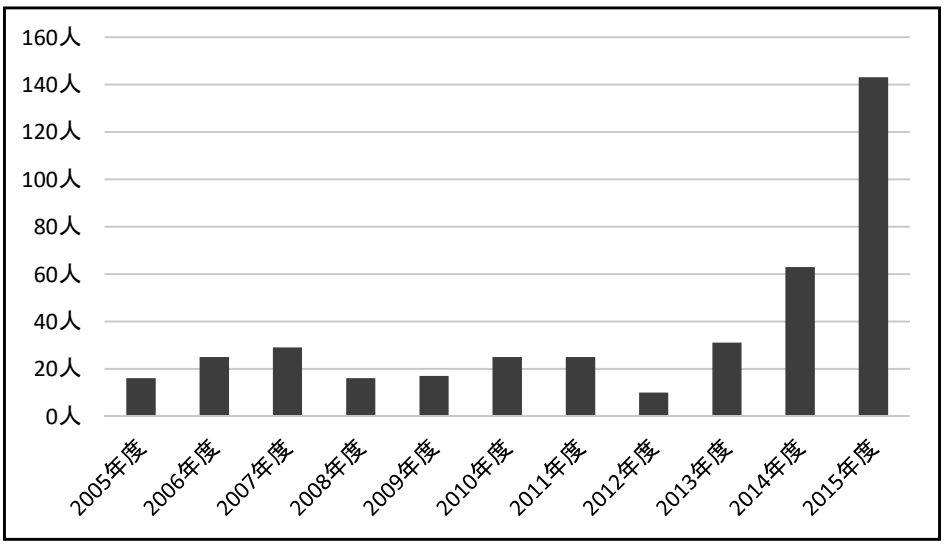

図１．年間登録児数

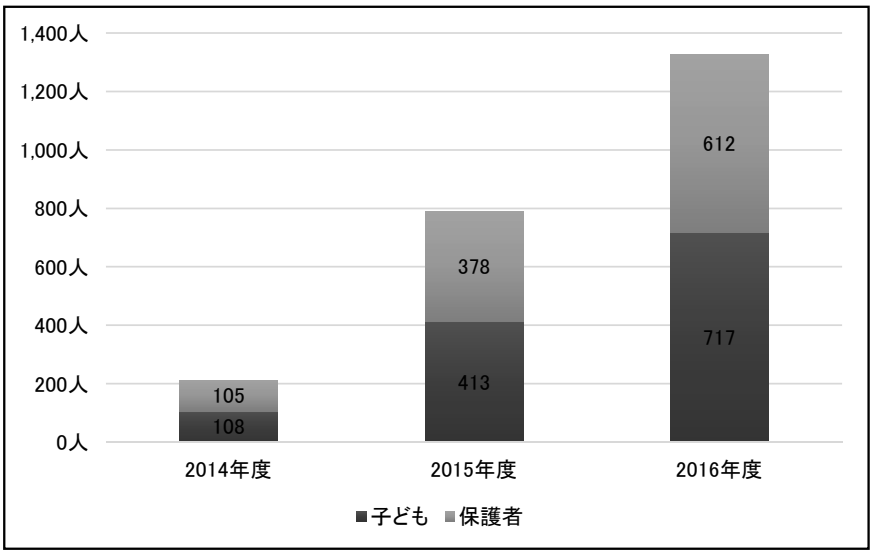

図２．近年の利用者数

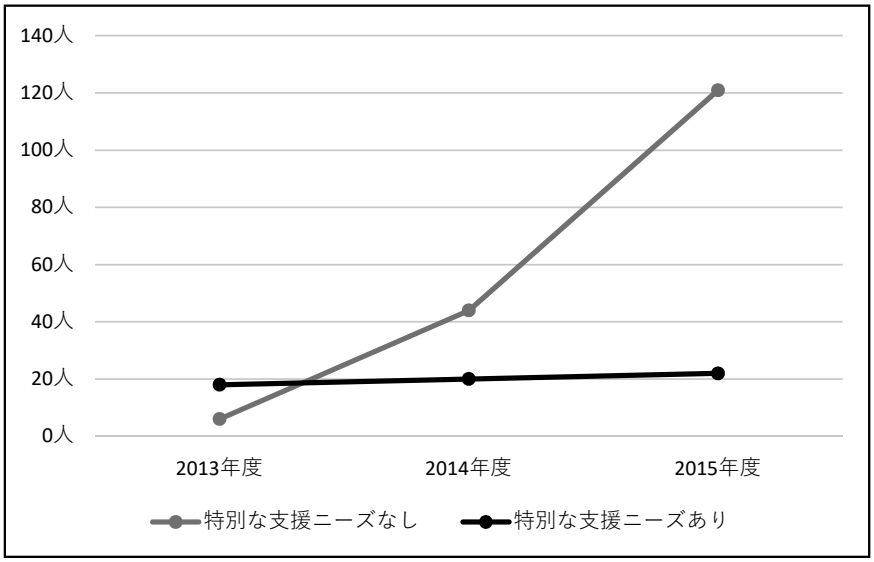

図３．特別支援教育の支援ニーズを持つ子どもの登録数

継続参加する中で、保護者から支援ニーズについて申し出があった場合とする。

４．方法

（１）対象者

2015年度の「子育てひろば」に参加している乳幼児親子の中で、2015年７月時点で２回以上参加している乳幼児の保護者24名を対象に、郵送にて無記名のアンケート調査を実施した。なおアンケート送付については、「子育てひろば」中の「あつまり」の時間内に事前に保護者へ案内し、協力が難しい場合についてはスタッフに声をかけてほしい旨を伝えた。回収数は16名で回収率は67％であった。

（2）アンケートの質問項目

主な質問項目は「日ごろ良く利用する遊び場」「他の遊び場との違い（a遊び場全体、bあつまりの様子、cスタッフ、dその他)」「継続参加理由」の３点について、それぞれ自由記述をしてもらった。

（3）分析の手続き

すべて自由記述式の回答であるため、分析についてはKJ法を参考に分析を行った。なお、分析するにあたり客観性を保つために、筆者以外に調査実施校の教員３名にも協力を依頼した。回収したアンケートの自由記述の分析手順は以下のとおりである。

① 一文を内容ごとにワンフレーズずつに区切る

② 同じ回答者であることが分かるように各回答者で色分けをする。

③ それぞれのフレーズについて、本「子育てひろば」に関する記述を黒、他の施設に関する記述を赤、両方に分類され得る記述を青とし、分析対象を黒で書かれた本子育てひろばに関する記述と、青で書かれた本子育てひろばと他の施設両方に分類できる記述を対象とする（その他の施設についての記述は、想起された施設が同一施設ではないため、回答に一貫性がないと判断されたため分析対象からはずす)。

④ KJ法を参考に分析をする。

（4）研究の倫理的配慮

本調査を実施するにあたっては、アンケート調査を実施した特別支援学校の学校運営委員会の承認を得て実施した。アンケートの実施前には保護者に対し「子育てひろば」にて、研究協力依頼を含め、アンケートの目的、内容および個人情報の取り扱いに関する説明を行った。

５．結果

（1）日ごろ良く利用する遊び場の分析

日ごろ、遊び場として利用する施設についてその有無と、どのような施設を利用しているかを尋ねたところ（複数回答可)、16名中15名が本「子育てひろば」以外にも、子育てに関する遊び場を利用していたことが分かった。またその遊び場は幼稚園や保育所の園庭開放（幼稚園の未就園児の会を含む)、自治体の実施する子育てひろば、児童館、の順に利用頻度が高かった（図４)。

（2）他の遊び場との違い

分析の手続きに従い、「他の遊び場との違い（a遊び場全体、bあつまりの様子、cスタッフ、dその他）」についての自由記述の分析をした結果を表１に示す。分析結果から、各視点を超えて、共通する因子が確認されたため、枠組みを統合して、「他の遊び場との違い」として、再度分析を行った。その結果、「安心･安全」「教材･遊具の充実と工夫」「子どもの反応」「保護者のモチベーション」といった５つの因子が確認された。またそれぞれの因子について、下位因子も確認された（表２)。さらに、これらの結果を図式化したものを図５に示す。なお、図内の数字は記述量を表す。「教材、教具の工

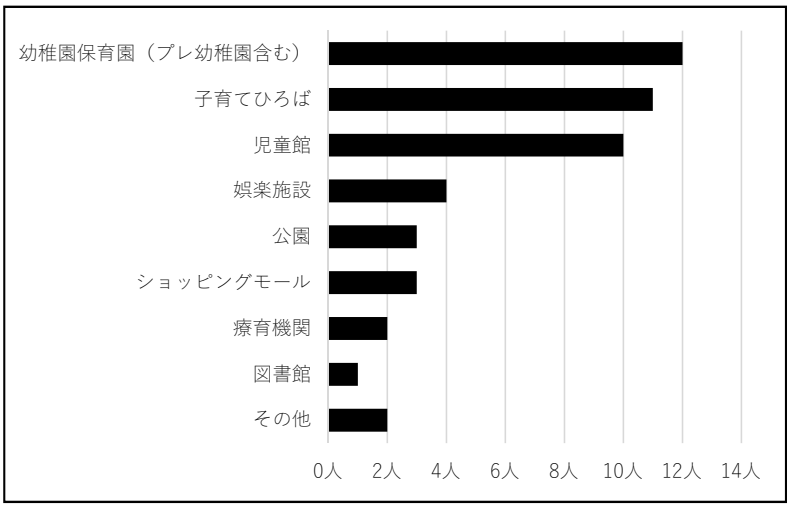

図４．日ごろよく利用する遊び場

表１．「他の遊び場との違い」自由記述分析結果

a. 遊び場について	b. あつまりについて	c. スタッフについて
①安心、安全	①あつまりの内容の工夫と充実	①スタッフの人数の多さ
②スタッフの積極的な親子への関わり	・参加型	②スタッフの声かけ
③教材、遊具の充実	・生演奏	・保護者への声かけ
④遊び場全体について	・教材の工夫	・子どもへの声かけ
・外遊びの充実	・内容の工夫	③専門性
・室内外の選択が出来る	②スタッフ	④安心感
・広さが十分にある	③子どもの反応	⑤保護者支援
⑤運営面への指摘	④プレ幼稚園の準備	

表２．「他の遊び場との違い」再分析結果

確認された項目
１．安心安全
・施設の安全性
・心理的な安心感
・スタッフの専門性と人員配置
２．教材・遊具の充実と工夫
・教材・教具の工夫
・遊具の充実
３．スタッフのかかわり
・子どもへの積極的なかかわり
・保護者への積極的なかかわり
４．子どもの反応
・子どもの反応が良い
・幼稚園へのレディネス
・家庭での再現
５．保護者のモチベーション

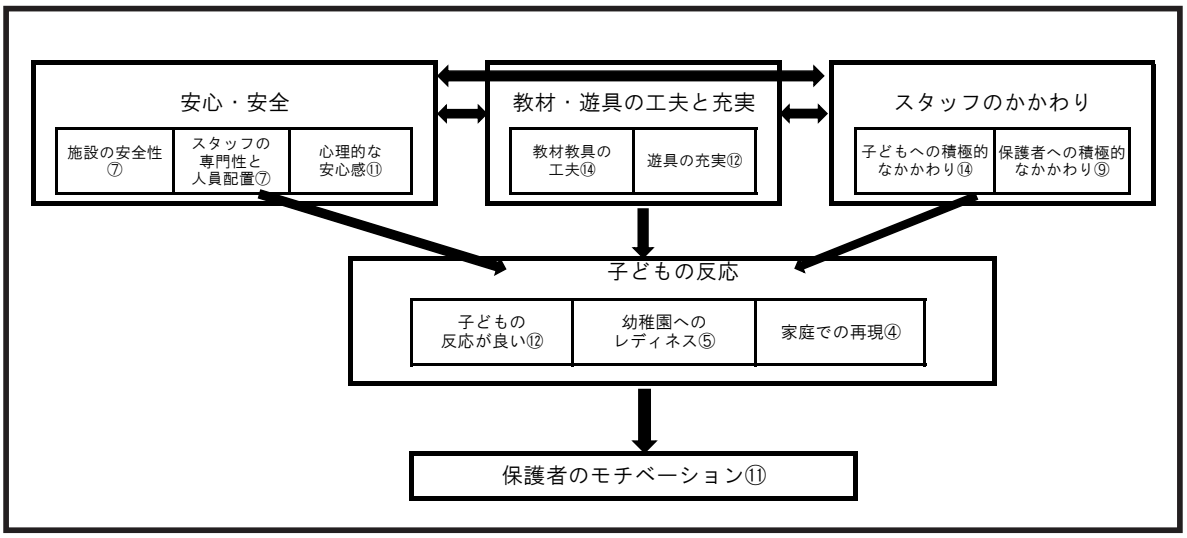

図５.「他の遊び場との違い」分析図

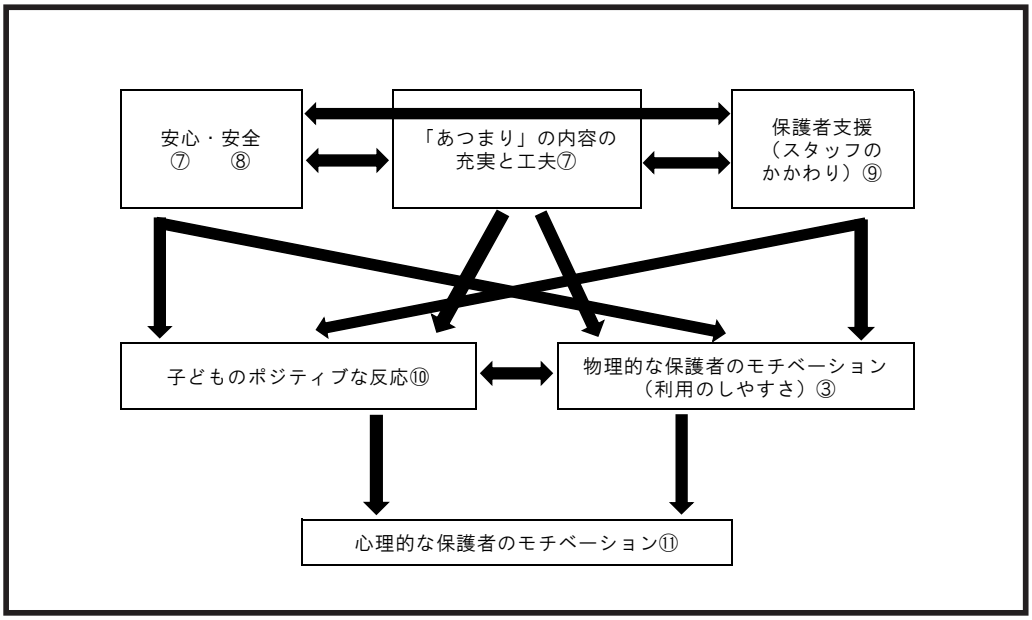

図６.「継続参加理由」分析図

夫」「子どもへの積極的なかかわり」が記述量14と最多であった。

（３）継続参加理由の分析

分析の手続きに従い、「継続参加理由」の自由記述を分析した結果、「安心安全」「保護者支援」「あつまりの内容の充実と工夫」「子どものポジティブな反応」「環境的な保護者のモチベーション」「心理的な保護者のモチベーション」の６つの因子が確認された。確認された因子を図式化したものを図６に示す。なお、図内の数字は記述量を表す。

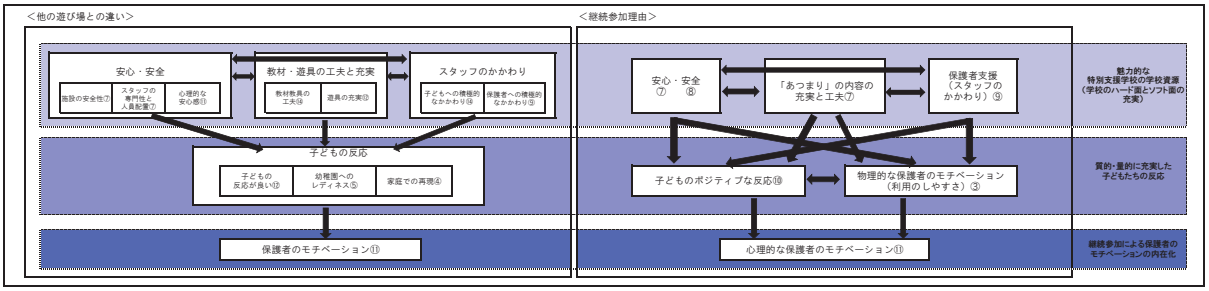

図７．「他の遊び場との違い」および「継続参加理由」の関係図

（４）「他の遊び場との違い」および「継続参加理由」の関係性

質問項目「他の遊び場との違い」および「継続参加理由」を図式化し分析後、２つの質問項目における関係性を検討するために再度図式化した結果、さらに両者に共通する３つの視点が確認された。それは、「魅力的な特別支援学校の学校資源（学校のハード面とソフト面の充実）」「質的にも量的にも充実した子どもたちの反応」「継続参加による保護者のモチベーションの内在化」の３点であった（図７）。

（５）自由記述

本子育てひろばへの意見や感想、質問等を自由記述できる項目を設置した。ほぼすべてのアンケート協力者が自由記述欄に記入をしてくださり、その内容の多くが感謝の言葉やスタッフへのねぎらいであった（表３）。改善してほしい点として挙げられた点として、回数を増やしてほしいという意見や、長期休暇中も開催してほしいという意見はあげられてはいたが、全体的に活動に対するネガティブな回答は見られなかった。

また特別支援学校幼稚部としての取り組みであるからこそ聞かれた意見として、「それぞれの先生方がスペシャリストという感じ」「子どもが広汎性発達障害の疑いと言われ・・・公園や保育園でも肩身が狭く、居場所がないような心細い気持ちになった・・・やっと居場所が見つかったという安心感」「相談ごとにも専門的に答えてくれる」「手のかかる子ですが・・・わがままでかんしゃくを起して活発で手がかかるが・・・大きく成長できました」、といった意見が出されていた。反して「特別支援学校」「障害児」といった特別支援学校の取り組みとして、キーワードになり得るワードに関する記述はほぼ見られなかった。

６．考察

（１）専門性の高い子育てひろばと保護者の利用ニーズ

本研究を調査した地域は、自治体主催の乳幼児親子が集える場所のほか、民間施設や娯楽施設も多くある地域であり、乳幼児親子は日ごろから日中過ごすことのできる施設を複数利用していた。たとえば、この時期から幼稚園の見学を兼ねて、幼稚園の未就園児の会（プレ幼稚園）や幼稚園や保育所の園庭開放への参加も多かった。それぞれの場所にはそれぞれ異なった保護者の利用ニーズがあり、それを保護者が選択し、それぞれの利用ニーズに沿った利用をしていることがうかがえ、本「子育て

表３．自由記述（一部抜粋）

いつも地域の子どものために、ありがとうございます。大好きなひろばですので、多くのママさんに知ってほしいです。夏休みがお休みで残念なのですが、また２学期もよろしくお願いします。
幼稚部の子どもたちともどんどん一緒に何かをできたら素晴らしいなぁと思っています。先生方はみなさん大変だとは思いますが、毎回毎回笑顔で迎えてくださり感謝いたします。
それぞれの先生が「スペシャリスト」という感じでとても頼りになります。他のあつまりで、子どものことを先生に注意されたりして、心配になっていたことも「子どもの個性」だからとポジティブに受け取る視線をいただけたように思います。皆様に感謝しています。
水曜日は毎週とても楽しみにさせていただいております。２歳児と０歳児を連れて出かけるのは大変ですが、ひろばでは、兄と遊ぶときに先生が弟を抱いてくださるので、普段兄に我慢させている分、思いっきり遊べることができます。相談ごとにも専門的に答えていただけるので、不安が解消でき、こどもにも優しくなれます。
ただ開放しているだけでなく、たくさんの先生方が安全面、本人の発達を見守ってくださり、親も安心して通うことができている。他に通われている親子の方々もよい方が多く過ごしやすいです。
すごく手がかかる子ですが、こちらだと楽しく元気に過ごせています。帰り道にいつも「楽しかった。また行こうね」と言っています。ここだけです。わがままでかんしゃくを起して活発で手がかかりますが、家の外でのルールは分かってきたようです。人とのかかわりを学んでいってくれるといいなと思っています。１学期通っただけで大きく成長できました。お友達に教えてもらって通いだしました。知ることができてラッキーでした。
私は、子どもが広汎性発達障害の疑いと言われ、保育園でもうまくいかず、途方に暮れていた時にインターネットで知りました。今、思い出しても、子どもに障害があるかもしれないことを受け入れることと、ではどうしたらよいのか（療育のことなど）、といったことが、同時におし寄せてきたときの不安感はきつかったなと思います。 公園や保育園でも、パニックになったりすると肩身が狭く、居場所がないような心細い気持ちになったこともありましたが、ここの先生方の温かさや専門的なアドバイス、やっと居場所が見つかったという安心感は、本当にありがたかったし、うれしかったです。希望を見いだせるようになったと思います。これからも私と同じように不安を抱いたり、迷ったりしているお母様方を受け入れてくれる暖かい場であり続けてほしいと思っております。
今までどう子育てしてよいのか迷うことの多い日々ですが、先生方からコツを教わったりすることで、親子ともども助けていただいています。もっと小さなころからにこにこひろばに参加すればよかったと少し後悔しています。
この地域に住んで子育てできてよかったと思えるほど、素晴らしい取り組みだと思っていますので、どうぞ続けていただければ幸いです。
地域の親子は休日、特に夏、冬、春の長期休みの過ごし方に困っています。特に園庭解放などはどこもお休み、児童館も小学生優先で乳幼児はご遠慮ください、という感じで・・・真夏、真冬は公園はいけないし・・柔軟な対応できる位置づけでしたら、園庭解放を期待したいところです。

ひろば」についても、保護者にとって利用するためのニーズがあると考えられた。

「他の遊び場との違い」を分析した図５において、「スタッフのかかわり」、特に「子どもへの積極的なかかわり」の記述量が多いことに気づく。園庭開放や娯楽施設よりも、取り組み内容から積極的にスタッフと乳幼児親子が関わる機会は多いことは想像できる。特別支援学校の教員をはじめ、幼児教育の専門家、子どもの発達や子育て相談の専門家など、多様な専門家の配置、適切な人数の配置は、ダイナミックに動きたい子ども、集団の中では緊張してしまう子ども、室内遊びが好きな子ども、初めての場所が苦手な保護者、たくさん話がしたい保護者など、多様なニーズを持つ子どもとその保護者がいる中で、対応の可能性を引き上げた。

また自由記述には、「今までどう子育てしてよいのか迷うことの多い日々ですが、先生方からコツを教わったりすることで、親子ともども助けていただいています」「子どもはもちろん大喜びですが、私も大変、一緒にいさせていただいて楽しい時間でした」「人とのかかわりを学んでいってくれると

いいなと思っています」といった意見が挙げられていた。これは単なる「遊び場の提供」ではなく、特別支援学校幼稚部としての本取り組みそのものが、教育的支援ニーズを持つ乳幼児やその保護者のみならず、現段階では教育的支援ニーズを持たない乳幼児保護者への支援へも生かされていていた結果であった。乳幼児親子は特別支援学校の「子育てひろば」に積極的に参加し、特別支援学校を「学びの場」として活用し、親子がともに遊んだり、ともに学んだりすることを求め、それを専門家としてサポートすることで本活動が成り立っていた。知的障害特別支援学校の実施する「子育てひろば」が、子育て中の乳幼児親子の利用ニーズの一部に寄り添っていたからであると考えられ、それらは、特別支援学校の学校資源が可能にしていたと推測された。

（2）特別支援学校の学校資源を地域に還元すること

「他の遊び場との違い」「継続参加理由」をそれぞれ分析した結果、抽出された因子のうち「安心・安全」「教材や遊具、あつまりの工夫や充実」「スタッフのかかわり、専門性」の３つの因子は特別支援学校としての学校資源が注目されていた（「魅力的な特別支援学校の学校資源」）。警備員のいる囲われた敷地内に、管理された遊具があり、安心して子どもを遊ばせることが出来る。特別支援学校幼稚部ならではの乳幼児にも使用しやすい遊具や教材が充実している。学校であるからこそ、教員の年齢も性別もさまざまであり、また専門性も違い、利用者に沿った支援や利用者一人ひとりのニーズにもこたえられるよう、人的にも物理的にも多様な環境を設定することが出来ていたと考えられる。

これら特別支援学校としての学校資源の充実が子どものポジティブな反応を生起させていると保護者は捉えていた。子どものポジティブな反応とは、「子どもがうれしそう」「（子育てひろばの）チラシを持ってくる」といった記述から見られ、子ども自身が「子育てひろば」を楽しんでいることが感じられる記述であった。こうした子どもたちの反応が最終的に、保護者のモチベーションにつながっていたと考えられた。提供される学校資源を利用するだけでなく、保護者自身が子どもと積極的に楽しみたい、学びたい場所になっており、保護者のモチベーションが内在化していったことが伺えた。

逆説的に考えると、どんな子育てひろば（乳幼児親子が集える場所）にも、その利用ニーズはあり、保護者が必要に応じて選択している。そこには保護者のモチベーションがあり、利用に対する子どもたちのリアクションもある。その中でそれらを生起させている要因として、本取り組みにおいては特別支援学校の学校資源が考えられた。特別支援学校という乳幼児親子にとってはなじみのない施設における取り組みであったとしても、近隣の乳幼児親子にとっては十分利用ニーズを見出せる取り組みとして、受け入れられていたと考えることが出来る。

（3）特別支援学校の子育て支援分野での地域貢献の可能性

本調査の中で特筆すべき点は、調査対象の中には、特別支援教育に関する支援ニーズを持った乳幼児親子も含まれており、また本取り組み自体が知的障害特別支援学校の実施するものであり、近隣地域の乳幼児親子にはあまりなじみのない施設であるにもかかわらず、どの保護者の記述からも際立って「特別支援教育」「障害」といったキーワードは挙がってこなかった点である。これらを鑑みると、乳幼児期の子育て支援に関しては、子どもの障害の有無、教育的支援ニーズの有無に関わらず、特別支援学校の学校資源は、「支援の場」や「遊びの場」の提供だけではなく、遊びを通した乳幼児親子

の「学びの場」として利用される場であることで、地域の子育て支援に十分貢献できる可能性があることが示唆された。

7．まとめおよび今後の課題

今回の調査によって、特別支援学校の実施する「子育てひろば」は多様な利用ニーズを持つ乳幼児親子の学びの場となり得、特別支援学校の学校資源を子育て支援の場で活用することで、地域の子育て支援の一部を担うことが可能であることが示された。今後は、その他実施している子育て支援事業を含め、総合的に特別支援学校の地域の子育て支援の特徴を捉え、どのような形で地域の子育てに貢献していくことが出来るのか、その可能性についてさらに検討を進める。またより一層、特別支援学校の取り組みを地域に還元していくことが望まれる。

8．付記

本研究は日本学術振興会科学研究費基盤研究B（課題番号25285258）の成果報告書、および2016年５月に行われた日本保育学会第70回大会（東京学芸大学）ポスター発表「知的障害特別支援学校幼稚部が行う子育て支援ひろばの試み」に加筆、修正をしたものである。

参考・引用文献

・藤原義博（研究代表)、超早期段階における知的・重複・発達障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業（大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実）－平成22年度研究進捗状況報告書、筑波大学附属大塚特別支援学校、(2012)
・藤原義博・田尻由起・森澤亮介・大蔵みどり・小笠原志乃・高橋幸子・若井広太郎、超早期段階からの知的・重複・発達障害児の一貫した特別支援教育支援体制モデル研究（成果報告書)、筑波大学附属大塚特別支援学校、(2016)
・木脇奈智子、多様化する「子育て支援」の現状と課題：新たなニーズとそれに対応する事例から、藤女子大学QOL研究所紀要、37-43、(2012)
・文部科学省　教育課程企画特別部会、「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告)」、(2015年８月)
・文部科学省、特別支援学校幼稚部教育要領、(2017年４月)
・文部科学省、幼稚園教育要領、(2017年３月)
・無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ、質的心理学―創造的に活用するコツ、株式会社新曜社、(2004)
・岡田由香・緒方京・神谷摂子・大林陽子・志村千鶴子・佐久間清美・金尾洋治・高橋弘子・恵美須文江、大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性を図る取り組み―大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告３―、愛知県立大学看護学部紀要、Vol.16、41-47、(2010)
・東京都教育委員会　東京都生涯学習審議会、「乳幼児期からの子供の発達を地域で支えるための教育環境づくりの在り方について（第一次答申)」、(2007年12月)

Études sur la tentative de carée《kosodate-hiroba》: le système communautaire de soutien parentalité par les sections pour jeunes enfants des instituts médico-éducatifs

TAJIRI Yuki*, MORIZAWA Ryosuke**

Résumé

L'objectif de cette étude est d'évaluer dans quelle mesure les activités ouvertes pour jeunes enfants, handicapés et non handicapés, organisées par les instituts médico-éducatifs（IME）pourraient jouer un rôle dans l'aide à la petite enfance. Elle se base sur le ressenti des usagers d'un de ces établissements.

Un questionnaire ouvert, portant d'une part sur les spécificités des IME par rapport aux autres structures, d'autre part sur les raisons pour lesquelles les usagers continuent de participer à ces activités, a permis de déterminer trois éléments explicatifs: la ressource scolaire attractive, la réaction positive des enfants, et la motivation procurée aux parents.

Ces résultats mettent en lumière le fait que les IME permettent de favoriser le développement des enfants tout en aidant les parents à comprendre leur propre rôle d'éducateur. Parents et enfants sont ainsi pleinement satisfaits de ce qu'ils considèrent comme un lieu d'apprentissage. Les IME semblent donc pouvoir jouer un rôle important dans l'aide à la petite enfance.

Mots-clés: soutien à la parentalité, Programme d'enseignement d'IME pour section l'école maternelle, Programme d'enseignement de l'école maternelle, aide à la petite enfance

* Université de Toyo

** Instituts médico-éducatifs à Otsuka, Université de Tsukuba